



# ツイッター歩きやはり危険

## こんな感じ 横方向視線いかず



スマートフォンを手に実験する愛知工科大の学生  
名古屋市中区栄で

愛知工科大(蒲郡市)の学生らが、名古屋市の繁華街でスマートフォンを操作しながら歩き、視線の移動範囲を調べる実証実験をした。短文サイト「ツイッター」に投稿しながらでは、横方向の視線が極端に減り、車やすれ違う人にも注意がいかなくなった。実験の結論はやはり、「危ない」だった。(細井卓也)

実験したのは、ドライバーの学生、大学院生ら計六人の視線などを研究する情報メディア学科の小塚一宏教授、山友希さん(二)と中(交通工学)と教授の研究室だった。

平日の昼下がり。中区栄の信号交差点で、機器を載せた帽子をかぶった中谷さんがスマートフォンを手に横断歩道を渡ると、つえを突いた高齢者とすれ違ったり、タクシィが近づいたりしても、視線は指を動かす画面にくぎ付けだった。実験は、手ぶら▽通話しながら▽ツイッターしながら

### 愛知工科大 名古屋でスマホ実験

の三パターンで約二十分の横断歩道を往復。カメラで瞳の動きを追う「アイマークレコーダー」を装着して計測した。警察から実験の許可も受けた。

手ぶら時を基準に視線の移動範囲を分析した結果、ツイッター時は横方向が三分の一に縮小し、縦方向は一・六倍に拡大。偏った動きとなったのは、被験者が横を意識せず画面を凝視し、たまに前を行く人を見たため。横断歩道を渡り切る時間は、平均五秒以上も余分にかかった。

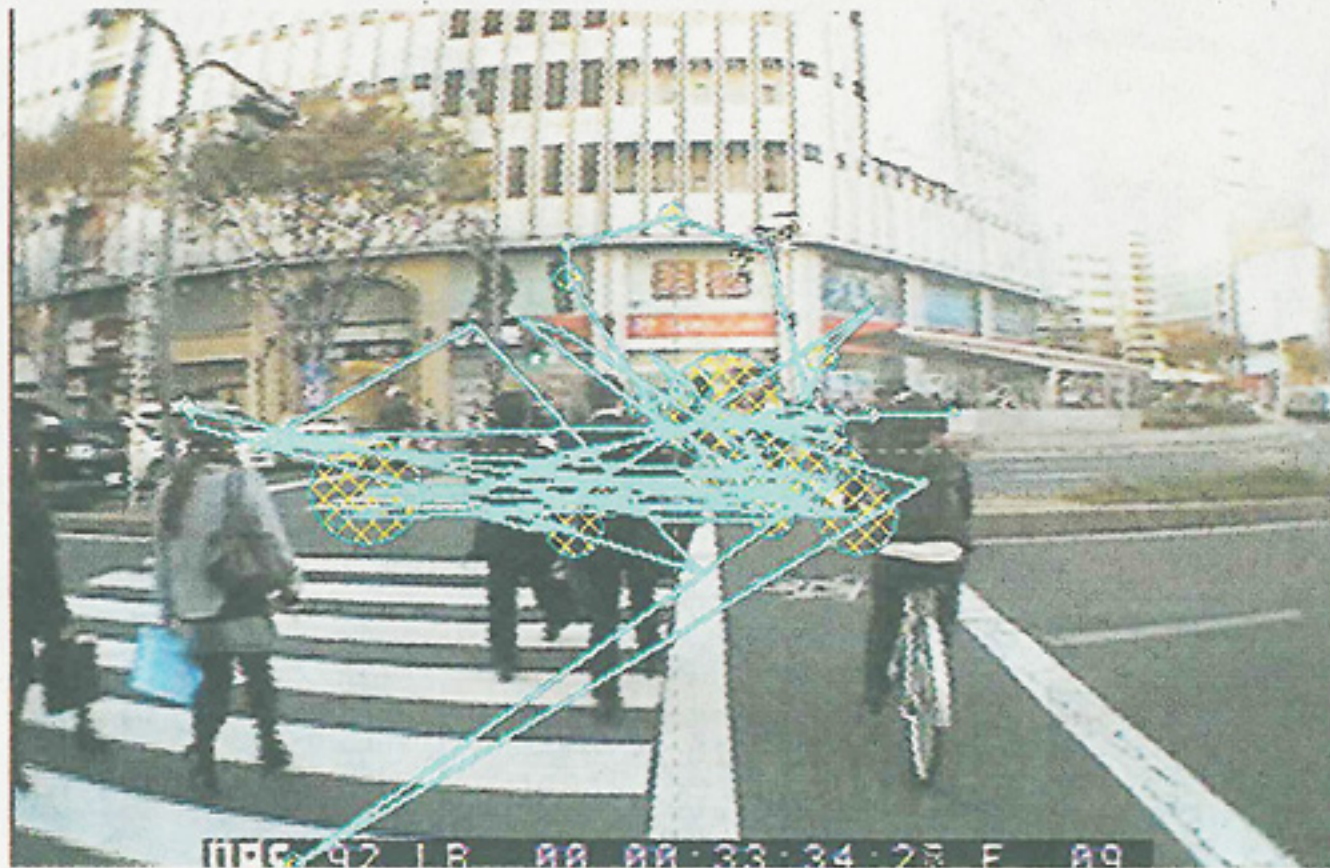
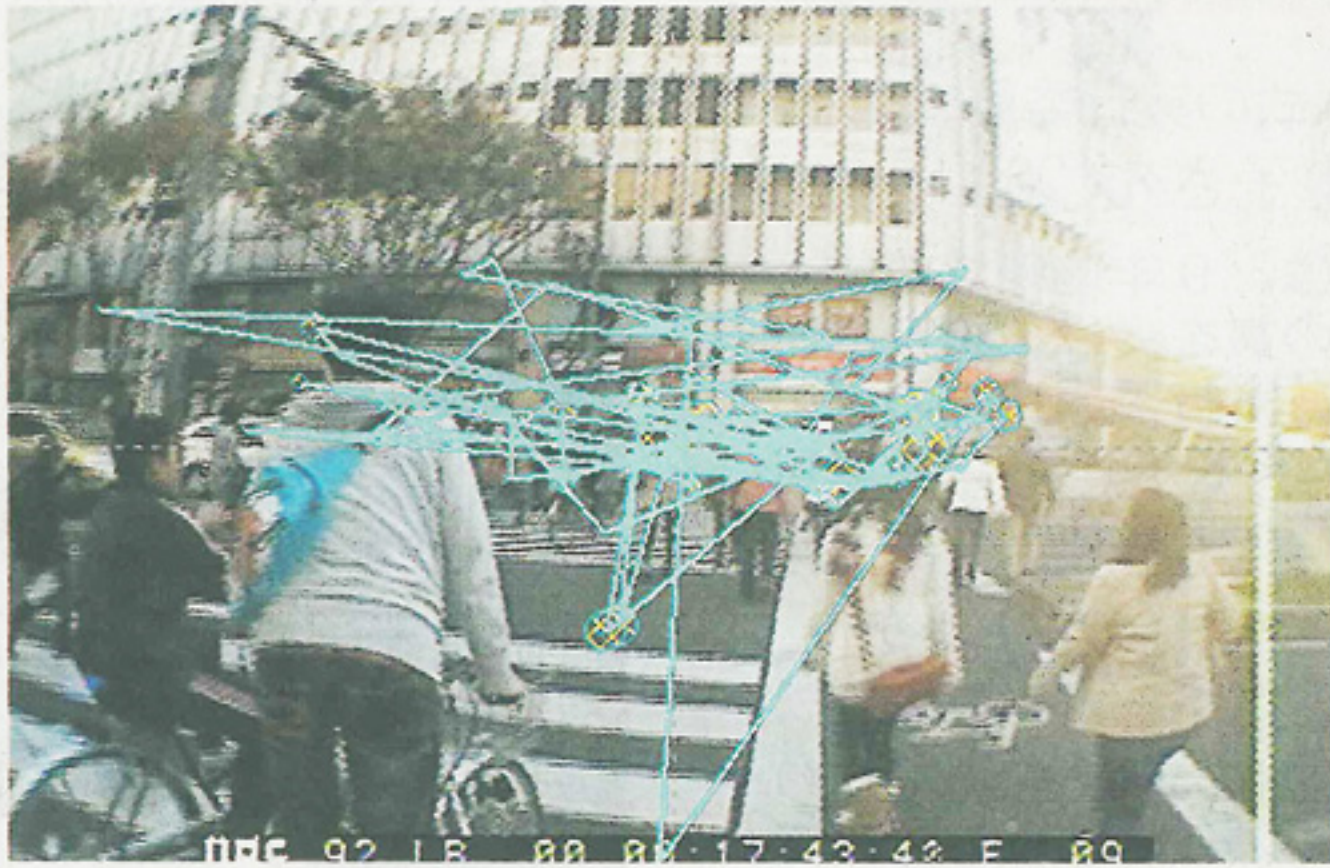
通話時は縦、横方向とも二割縮小し、視線が一点に長くとどまりやすい傾向が出た。視線が不自然に遠くに流れ、上の空状態だったことがうかがえる時間もあった。

当初、ツイッターしながら歩くのに抵抗感がなかった二人。結果に中谷さんは「これだけ周りを見ていないとさすがに危ない」。中山さんは「画面を見たりする際、壁を背にして立ち止まると良いのでは」と提案した。

小塚教授は「画面を見ながら歩くのは無防備。人混みでは、歩く速度が異なる高齢者や幼児、障害者とぶつかり、加害者になることも十分あり得る」と指摘する。

スマートフォンの普及で携帯電話は「聞く」から「見る」に。街でのマナーを考え直す時期に来ているのかもしれない。

## 視線 比べると… (下の写真はいずれも名古屋市中区で、愛知工科大提供)



### 手ぶら

手ぶらで歩いている時は数分離れた人や自転車、車にも視線を向けている

### ツイッター

ツイッターをしながら歩いた場合。横方向の視線の動きが極端に少ない

### 通話

通話時は視線がとどまる点(黄色の網かけ部分)が多く出た